

第10編 大東亜戦争のその後

第1章 戦後、連合国によって再侵略されたアジア

日本が東京裁判で、連合国により裁かれているとき、連合国はアジア諸国に何をしていたのでしょうか。

日本軍がアジア諸国から引き上げた後、連合国は元の植民地を取り戻すために、アジアに再侵略をしてきたのです。戦後の復興支援をしてくれるどころか、すでに、独立を表明しているアジア諸国に対しても、その独立を蹂躪していたのです。

台湾は、蒋介石率いる中国国民党によって占領され、1947年の2.28事件では、数万人もの民衆が虐殺されました。

チベットは、国民党が権力を握っていたときから侵略されようとしていましたが、1950年、中国共産党政府によって侵略され、独立を失った後120万人以上のチベット人が殺害されました。

東トルキスタンは、1949年、中国共産党軍が進駐し、1955年に「新疆ウイグル自治区」とされ、今なおウイグル人に対する迫害が続いています。

他のアジア諸国も、ラオス、ベトナム、カンボジアは再びフランス軍によって占領され、ベトナムに至ってはその後、15年近くも独立戦争を強いられ、国土は荒廃しました。

インドネシアもイギリス軍、次いでオランダ軍によって一方的に攻撃を受け、3年半の独立戦争で、婦女子を含め約80万人もの犠牲者を出しました。

そして、朝鮮は米ソによって南北に分断され、1950年6月25日、朝鮮戦争が勃発しました。これが、東京裁判中とその直後にアジアで起こった「現実」です。

それでは、なぜ日本の敗北後、アジア諸民族は、連合国による侵略に苦しめられたのか、理由は明確です。ソ連共産主義勢力や欧米植民地政府の侵略に対する「盾」となっていた日本軍がいなくなったからです。

大東亜戦争初期において日本は、アジアを支配していた欧米の植民地政府を次々と打倒していききました。この絶好のチャンスを生かして、アジアの指導者たちは次々と独立を宣言したのです。

1943年8月1日、パー・モーがビルマ独立を宣言、10月14日、ラウレル大統領がフィリピン共和国独立を宣言、10月21日、チャンドラ・ボースがシンガポールに自由インド仮政府を樹立し、1945年8月17日、スカルノがインドネシア独立を宣言しました。

ところが日本軍の敗北によって、これら新興独立国は、自らの力で欧米による再侵略と対峙せざるを得なくなりました。戦勝連合国は、植民地を放棄するつもりはさらさらなく、独立の後ろ盾となっていた日本軍が降伏した以上、アジア諸民族も再び欧米の軍門に下るに違いないと、欧米連合国は思っていました。しかし、アジア諸民族は、一旦手にした「独立」を手放す気はなかったのです。その結果、連合国とアジア諸民族の間に「戦争」が勃発することになるのです。

そして、連合国による戦後の「侵略戦争」を正当化した論理が、東京裁判史観であり、「侵略国家」日本と連携して、独立を宣言したアジアの独立指導者たちは、日本と同じ軍国主義者であり、その独立は認められない・・・と主張したのであります。しかし、こうした連合国の論理に、インドやインドネシアは屈しなかったのです。戦後、イギリスは東京裁判に倣って、インド解放の

ため、日本軍とともにインパールにおいてイギリス軍と戦ったインド国民軍将兵二万人を「宗主国イギリス女王陛下に対する叛逆罪」で裁こうとしたのですが、裁判に反発したインドの人々は、インド国民軍は「侵略国日本に協力し、イギリスに対する反逆行為をした犯罪人」ではなく、「インド独立の英雄だ」として、抗議行動を展開しました。この抗議行動のうねりに屈したイギリスは、銃殺刑にしようとしたインド独立国民軍の連隊長セイガー、シャヌワーズ、クロバク・シンの三名を即座に恩赦し釈放、1947年8月15日、インドは独立を勝ち取りました。

インドネシアは、インド以上の苦難を嘗め、日本軍人の支援等により三年半にわたる対オランダ独立戦争の後、オランダとの最終的な講和条約があったのは1949年でしたが、オランダは犠牲者に対する一切の謝罪を行わなっただけでなく、オランダ政府が正式にスカルノによる独立宣言を認めたのは、2005年になってからであります。

第2章 昭和天皇と戦後

日本敗戦直後の昭和20年9月27日、昭和天皇が敗戦国の代表として、戦勝国のマッカーサー元帥を訪ねたとき、天皇は長時間待たされた挙句、やっと現れたマッカーサーは、当初、足を組みながら、天皇に対応しました。マッカーサーは天皇が命乞いに来ると思っていたのです。ところが、天皇は命乞いどころか、戦争の開戦から終戦に至る一切の責任は自分にあり、自分の身は、連合国の判断にゆだねると述べ、一言の弁解もしませんでした。そして、さらに天皇は、「罪なき8,000万の国民が、住むに家なく、着るに衣なく、食べるに食なき姿において、まさに深憂に堪えないものがあります。温かき閣下のご高配を賜りますように」と願われたのです。

マッカーサーは天皇の一切の私心無き言葉に感動し、帰りには玄関まで見送りました。マッカーサーにとって、最大の好意の表れでした。後にマッカーサー回顧録で、「私は、昭和天皇と接した瞬間、電気が体を通り抜けるように私の前にいる天皇が、日本の最高の紳士であることを感じ取った。」と、述べているのであります。

また、昭和天皇は、焦土と化した全国を巡り、国民を励ましたいと強く希望され、当時の宮内庁次長加藤進氏に次のように述べられました。**(コラム 78 参照)**

全国のご巡幸(写真)は、昭和21年2月18日に神奈川県にお出ましになられて以来、8年6カ月、昭和29年8月23日に終えられました。ご視察日数165日、ご視察箇所は46都道府県、総行程3万3千キロにおよびました。

昭和天皇をお迎えした国民のよろこびはたいへんなものでした。戦後、現在の日本がみごとに復興を果たしたのは、国民の努力の賜ものであることは勿論ですが、同時に昭和天皇があの大東亜戦争の責任を一身におわれ、国民を慰め励ましたい御心で、巡礼の行脚そのままに全国を行幸され、国民を感激させ奮い立たせたからであります。そのことは、ご巡幸の際に接した多くの国民の声が証明しております。



天皇陛下の全国ご巡幸

昭和天皇が昭和 22 年 6 月 11 日、兵庫県を訪れた際に、神戸市立第一高女三年生の岩國美幸さんが「幸福の扉が開かれた日」という題で「陛下の一行が私の前までこられたとき、五体の機能が一時に活動を中止したように感じた。とたん陛下が私達女学生をご覧になって、私に『本はありますか、長い間、待ちましたか、これからも一生懸命に勉強して下さいね』と、おっしゃった。感きわまって何にもいえなかったが、やっと精いっぱい心を込めて『はい有難うございます』と、お答えした。陛下のじきじきのやさしいお声をお聞きして、理屈ぬきの日本人である伝統の血のつながりを強く、強く感じた。六月十一日、本当に光栄の日、感激の日。一生記念すべき日、そして幸福の扉が開かれた日である。」と書いています。(コラム 79 参照)

第 3 章 大東亜戦争の歴史的意義

わが国は、大東亜戦争の開戦からおよそ六ヶ月間で、欧米人をアジアから追い出しました。日露戦争の日本の勝利は、アジアの人たちに感銘を与え、勇気づけましたが、戦場が満州や日本海であったため、アジアの人たちは、日本軍の実際の戦いぶりを見ていません。しかし大東亜戦争の戦場は、自分たちの国内であり、身近な存在でありました。今まで自分たちを支配していた白人が、日本軍に敗れ、捕虜になる姿を見たわけです。アジアの国々は、50 年から 350 年以上にわたり、白人に支配されていました。日本軍は白人に対する劣等感を払拭させ、さらに彼らの民族意識を高めることができました。

イギリス東洋艦隊には、世界に誇る最新の不沈戦艦、プリンス・オブ・ウェールズとレパルスの 2 艦があり、その 2 艦が日本海軍航空隊に簡単に撃沈されました。このことの歴史的意義について、歴史学者、アーノルド・トインビーは「日本人が歴史上に残した業績の意義は、西洋人以外の人類の面前において、アジアとアフリカを支配してきた西洋人が、過去 200 年の間考えられていたような『不死の半神』でないことを、明らかにした点にある。」と述べています。(コラム 80 参照)

そして、陸上での象徴的な戦いは、シンガポールの陥落であります。シンガポールは、西洋のアジア支配の象徴そのものであり、このシンガポールの要塞を守っている、イギリス軍 10 万に対し日本軍はわずか 3 万の兵力で、約 2 ヶ月半で攻略しました。緒戦 6 ヶ月間の勝利とその後の 3 年間の戦争、合計 3 年半の戦争の間に、東南アジア各国が独立したり、あるいは独立できる準備期間を与えました。さらに、この期間に日本軍がアジア各国の人たちに戦争の仕方、愛国心、闘争精神について、教えたのです。

上智大学名誉教授である渡部昇一氏はその著書である「かくて歴史は始まる」(三笠書房)において、日本が大東亜戦争に突入せざるを得なかった大きな理由として次の 4 つをあげています。

第 1 は、アメリカの人種偏見と西進政策から来た対日敵視政策、またそれに関連しての

日英同盟の廃止

第 2 に、日本の経済を危機に追いやったアメリカ、イギリスのブロック経済への突入。

第 3 に、北から迫るソ連の共産主義の脅威

第 4 は、元老という歯止めを失った明治憲法の欠陥であった

そして、特に第1と第2の理由に関連し、「日本の敗戦で歴史の流れが逆流するどころかかえってその勢いはほん流のごとくになり、世界中から人種差別が追放され、多くの植民地が独立するという結果になった。また、世界各国はブロック経済を捨て、自由貿易を盛んにするための努力を続けるようになった。日本は敗れたが、結果は日本の望むとおりになったのである。歴史におけるパラドックス（逆説）を日本は実現したのである。」と述べています。（**コラム 81 参照**）

第4章 世界各国の大東亜戦争に対する評価

戦後の1955（昭和30）年に開催された第一回アジア・アフリカ会議（バンドン会議）の席上で、各国の代表は、日本側代表に対して異口同音に「日本が多大な犠牲を払って大東亜戦争を戦ってくれたお蔭で、今日我々は白人諸国と対等な立場でいれるようになった」と、感謝されている点については前述しましたが、ここでは、戦後、世界各国が大東亜戦争をどのように捉えていたか、代表的な人の意見を取り上げてみます。（**コラム 82 参照**）

タイ国の元首相であったククリット・プラモードは、1955年12月に「12月8日」という題で、次のように述べています。「日本のおかげで、アジア諸国はすべて独立した。今日、東南アジアの諸国民が、米・英と対等に話ができるのは、身を殺して仁をなした日本というお母さんがあったためである。12月8日は、日本が一身を賭して重大な決意をされた日である。われわれは、この日を忘れてはならない。」

また、1991年、オランダ・アムステルダム市長は、日本の傷痍軍人会代表団が、オランダを訪問した際に、次のような挨拶をしています。「本当に悪いのは、侵略して、権力を振るっていた西欧人のほうです。日本は敗戦したが、その東亜の解放は実現しました。すなわち、日本軍は戦勝国のすべてを、東亜から追放しました。その結果、アジア諸民族は各々独立を達成しました。日本の功績は偉大です。血を流して戦ったあなた方こそ、最高の功労者です。自分を蔑むのを止めて、堂々と胸を張って、その誇りを取り戻すべきです」

さらに、あの東京裁判の最高責任者であったマッカーサー自身が、1951年5月3日に、米国上院軍事外交合同委員会において、「日本は絹産業以外には、固有の産物はほとんど何も無いのです。日本が原料の供給を断ち切られたら、1千万から1千2百万の失業者が発生することをかれらは恐れていました。したがって、彼らが戦争に飛び込んでいった動機は、大部分が、安全保障の必要に迫られてのことだったのです。」と証言しています。下線部分の原文は次の通りです。

Their purpose, therefore, in going to War was largely dictated by Security.